

1. 特に効果的であり改善に資した事例について

A. コースワークの充実・強化

①人材養成目的に沿った科目構成の整理

●順天堂大学医学研究科医学専攻

「研究能力と専門性を育む大学院教育の実践」の事例

(具体的に何を実施したのか)

本学大学院医学研究科は、医学を人間に関する総合科学と位置付け、不断前進する医学的知識・技術を理解・実践し、更にはこれを自ら更新する能力を修学する教育・研究の場であり、学是「仁」の心を兼ね備えた医学・医療の指導者・実践者を国際的レベルで育成する教育研究の拠点である。このような基本理念に立脚し、生涯にわたって医学と向き合う姿勢をもった基礎医学者と臨床医学者、あるいはその両方を兼ね備えた Physiician-Scientist、究極的には心身共に病める人々を救済する“志高き医師・医学者”を育成することを人材養成目的としている。

この人材養成目的を踏まえ、従来の教育プログラムを見直し、Unit 制のコアプログラム・専門プログラムとして体系的な教育プログラムへと再整備した。コアプログラムでは、共通基盤教育として、医学研究者に必要とされる基礎的知識、科学的思考法や研究方法論、課題解決能力等を学修し、自律的研究能力、専門性と国際的通用性の礎を養う。専門プログラムにおいては、研究者養成コース、高度臨床専門家養成コース、スペシャリスト（感染制御専門家、がん専門家 等）養成コースを設け、各研究分野において大学院生の多様なキャリアパスに対応したカリキュラムを構築し、研究能力と専門性を育む大学院教育を実践している。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

コアプログラムにおいては、開講している講義等の実施状況を常に評価し、出席状況の芳しくない講義の分析を行い、授業の見直しや、統廃合等の検討を実施した。また、専門プログラムでは、大学院生の所属する研究分野において、実態に即した教育プログラムとすること、また、養成する人材像・キャリアパス等に応じてカリキュラムを設定することを考慮し、整備を行った。

これらの取組をより組織的に行うため、研究科長の諮問機関である大学院検討委員会の下に設置した教育小委員会において、きめ細やかな検討・見直しを、恒常的に行った。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

コアプログラムにおいて講座の枠にとらわれない教育を行い、専門プログラム

では幅広い医学研究分野において知識・技能を習得し、専門性を高める教育を行った結果、自立した医学研究者として大学教員となる者をどの程度輩出したかという点が本プログラムの成果の一つと考える。その点、本研究科を修了した大学院生は、研究者として高い就職率を維持している。このことは、志高き医師・医学者を育成することを目指す本学の人材養成目的に照らしても一定の成果を挙げたと判断している。

また、教育プログラムの実質化の一つとして、シラバスを充実し、本学で行える教育・研究を明確化させ、入学者数及び定員充足率を大幅に向上させることができた。なお、平成 22 年度からは、入学者数の実態にあわせ、定員を 80 名から 100 名へ増員した。

1. 特に効果的であり改善に資した事例について

A. コースワークの充実・強化

④社会人、留学生、他分野・他大学からの多様な大学院生に対応した基礎学力補完教育の実施やカリキュラムの提供

《医療系》

●順天堂大学医学研究科医学専攻

「研究能力と専門性を育む大学院教育の実践」の事例

(具体的に何を実施したのか)

多様な学修歴を持つ社会人の大学院教育へのアクセスの拡大を図るため、夜間における大学院特別講義の実施や、E-Learning等の整備を行った。また、共通教育コース(Unit1)のBasic course(大学院初期教育、1年次必修)およびAdvanced Course(研究プロジェクト遂行と学位論文作成のための基礎教育、2年次必修)を整備し、他分野・他大学出身の大学院生にも対応した基礎教育を充実させた。

そのほか、外国人留学生を対象とした日本語講座の設置や、英語集中プログラム(英語講座および、大学院特別講義の英語による実施)等、大学院生の国際性の涵養を図るとともに、多様な大学院生に対応した教育カリキュラムを構築した。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

大学院生に対し、大学院特別講義の開講希望時間についてアンケートを実施するなど、よりアクセスしやすい大学院教育カリキュラムの構築を図った。また、平成21年度には、Unit1のBasic courseおよびAdvanced Courseについて、多様な学修歴を持つ大学院生にとって、各講義をそれぞれ1年次と2年次の何れの時期に学修することが望ましいか、大学院検討委員会、教育小委員会、FD等で再検討し、コース内容の再構築を行った。そのほか、日本語講座をさらに発展させ、研究科長日本語特別講義としてコース制で実施するなど、多様な学修歴を持つ大学院生に対応したカリキュラムの充実にあたり、恒常的な改善・見直しを行った。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

大学院特別講義、E-Learning、日本語講座、英語講座等は、それぞれ多様な学修歴を持つ大学院生や時間的制約のある社会人大大学院生に対応した授業形態であるため、大学院生にも好評であり、多くの受講者があった(プログラム補助期間における受講者数 大学院特別講義:1880名、E-Learning:103名、日本語講座:95名、英語集中プログラム:512名)。

社会人や留学生等、多様な大学院生が他の大学院生と同様に充実した学修・研究を行い、大学院生が増えるなかでも、その質を落とすことなく、継続して高い

学位授与率を維持することができたことは、本プログラムの成果といえる。